



Woman of YAMAGATA

これからの 「仕事」の 話をしよう



令和2年度 山形大学 基盤共通教育の授業
「キャリア形成とワークライフバランス(山形から考える)」探究ノート

《 講義内容 》

- | | | |
|--------------------|--------|----------------------|
| 01 困難も時を経て希望に | 佐藤 和佳子 | 学術研究院教授(医学系研究科) |
| 02 経験しないうちは失敗ですらない | 荒木 志伸 | 学術研究院准教授(学士課程基盤教育機構) |
| 03 2拠点居住という選択 | 濱 定史 | 学術研究院助教(理工学研究科) |
| 04 研究者のワークライフバランス | 網干 貴子 | 学術研究院准教授(農学部) |
| 05 マルチステージのライフデザイン | 小倉 泰憲 | 学術研究院教授(理学部) |
| 06 男性の家事・育児への参加 | 小野 卓也 | 曹洞宗洞松寺住職 |
| 07 学童クラブを支えるNPO活動 | 富澤 直人 | 学術研究院教授(人文社会科学部) |
| 08 長い目で見て柔軟性を持つ | 中西 正樹 | 学術研究院教授(地域教育文化学部) |



困難も時を経て希望に

10月21日(水) 14:40~16:10

講師

佐藤 和佳子

学術研究院教授(医学系研究科)

Profile

60歳代
山形県出身

高齢者看護学を担当。介護を要する高齢者の自立と自己決定支援をテーマに、フィールドワーク等に取り組んできた。現在は、家族の立場からも介護を体験中。

● 就職した動機と仕事の内容

動機:高齢者看護を専門とする仕事に従事し、勉強を継続したいと考えたため。
仕事の内容:学部では、高齢者看護学の授業・実習、卒業研究を担当、大学院では、老年看護専門看護師の育成、博士前期、後期課程での研究指導に従事している。

● これまでの道のり

高校を卒業後、看護師養成の専門学校に入学し看護師の資格を取得。看護師として7年間臨床に従事する中で、高齢者の方の終末期ケアなど、より深く学びたいと考え立教大学法学部に進学した。学部卒業後、筑波大学大学院医科学研究科修士課程で、高齢者リハビリテーション・看護学を専攻、修士を取得。その後、本学医学部看護学科臨床看護学講座に助手として着任。高齢者の排尿障害の研究に取り組み、博士を取得した。1999年に臨床看護学講座教授に着任。

● ワーク・ライフ・バランス

今年92歳になる父がひとり暮らしで郷里に在住。在宅介護サービスや通所ケアを利用させて頂きながら過ごしてきたが、今夏、同町の特別養護老人ホームに移った。仕事の継続について迷ったが、介護と両立していけるように努力したいと思っている。

● 夢や目標

12年前にがんの治療を受け、再発・転移や死がとても身近にあったので、日々充実して、志した看護の教育研究に従事できていること自体、夢のように思う。未来を担う学生の皆さんに少しでも有用な情報提供ができるように、1日1日努めていきたいと思う。

● 学生へのアドバイス

これから、思いがけないことで苦しい状況に直面する体験もあるかもしれない。どのような困難も、時間を経て、新たな自分の発見や生き方に繋がりが希望が見えてくる。

● 「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

職場から介護への理解や配慮を頂けることが、どれほどの励みになることかと思う。



① 壁にぶつかったときはどうしたら良いと思うか。

A 時間というものが大事。
「日にち葉」という言葉もあり、時間が解決してくれることも心に留めておくとう良いと思う。

講義の振り返り

- 先生が仰っていた「壁があっても、時間をかけて受け入れていく力が人間にはある」という言葉は病気の人だけではなく、多くの人に勇気をくれる言葉だと思う。
- 一度決めた道で安定して過ごすのではなく、知識が足りないという思いで学び始めたことや、病気から回復後に国際的な活動を実現されたことなど、勇気と行動力があがり、全力で人生を送っていらっしゃる素敵なお方だと思った。
- 高齢者の介護には身体的なケアだけではなく、本人の意思の尊重が何より重要だと感じた。介護は自分がする側、される側としてかわる機会があるし、自分に無関係なことではないと思った。がんサバイバーシップという考え方にも感銘を受けた。
- 「ひとりで悩まない」「100点を目指さない」「親は親、子どもは子ども」「時間をかける」「人生の過程に思う」という言葉に、今までもやもやしていたものが軽くなった。「今日をギフトだ」というお話を忘れずに、1日1日を貴重なギフトと思って大切に生きていきたいと思った。

経験しないうちは失敗ですらない

11月4日(水) 14:40~16:10

講師

荒木 志伸

学術研究院准教授(学士課程基盤教育機構担当)

Profile

40歳代
東京都出身

専門は日本考古学。東北芸術工科大学、明治大学などを経て、2011年より現職。山形に来たことを契機に、山寺や出羽三山、松島瑞巖寺で調査研を行う。2016年山形大学優秀教育者賞受賞。

● 就職した動機と仕事の内容

小学4年生の時に、発掘現場を見学したのを契機に、考古学関係の仕事に就きたいと考えようになった。専門とする時代は、奈良・平安時代。東北地方に特別におかれた「城柵」という古代の役所や、庶民の生活(信仰や食文化、感染症対策)を研究している。また、山形に来てからは、山寺などの考古学的調査も行なっている。

● これまでの道のり

考古学分野では都道府県の埋蔵文化財センターや教育委員会等の行政職がある。当初は、これらの仕事を目指していた。学生時代にお会いした先生達とのご縁で、東北芸術工科大学に赴任した。しかし、両親の急病で自己退職し、改めて3年を期限に就活した結果、103連敗ののち山形大学に奇跡的に拾って頂いた。

● ワーク・ライフ・バランス

主人も同じ大学の研究職なのだが、夫婦間のなかでの家事分担など、意識のずれを感じることが多い。また、高齢の両親が神奈川に住んでおり、今後どうするか悩んでいる。

● 夢や目標

自分の研究が、地域の方々に元気にし、そこで生きていく勇氣のようなものになれば望外の喜びと考えている。「ここ、何もないと思ってたけど、良いとこなんだな〜」と言われると、涙腺が完全崩壊する。地味ながらも身近な文化財の歴史的価値を、きちんと調査し伝えていくことで、その土地の魅力を発信できたらと思う。

● 学生へのアドバイス

私自身が「〇〇のような仕事、したいけれど、無理だね…」と自らの可能性を狭くしていたような気がする。しかし、好きなこと(国内外の発掘調査)を通じて、たくさんの人と出会い、考えることで、徐々にだが気持ちに変化が出てきた。



❶ 就活でうまくいかないことが続いたときに落ち込みませんでしたか。

A 落ち込むのは時間のむだだと思いき、自分の何がダメだったのかを聞いて回ったり、次の資料準備の時間にあてた。

講義の振り返り

- ❶ 失敗談やためになる話を沢山聞くことができ、とても勇気づけられた。「きつめのアドバイスをくれる人を大事にする」というのは、本当にそのとおりで思った。
- ❷ 失敗することは怖くないと感じた。諦めなかったことで仕事を得ることができたと聞きし、挑戦していれば道は拓けるのだと思った。「考古学が好きで研究したい」というブレない意志があったと感じた。
- ❸ 先生は周囲の反対があいながらも失敗を恐れず、自分のやりたいことを貫き通していた。自分は失敗が怖いと思っていたが、「経験しないうちは失敗ですらない」という言葉どおり、様々なことにチャレンジしていきたい。
- ❹ 「女性を軽視するような会社に発展は望めない」というお話に賛同した。さらに、多くの失敗や災難な出来事が立て続けに起こっても、諦めない志と執念さえあればなんとでもなると感じる事ができた。

2拠点居住という選択

11月11日(水) 14:40~16:10

講師

濱 定史

学術研究院助教(理工学研究科担当)

Profile

40歳代
茨城県出身

専門は木造建築構法、改修再生設計。伝統的な木造建築について、研究および設計活動を行う。山形と東京の2拠点居住。妻と娘は東京で暮らす。

● 就職した動機と仕事の内容

もともとのものを作ることが好きだったので、建築設計事務所でのデザインの仕事をした。ものを実際に作ること(設計・デザイン)だけでなく、それらの原理や仕組み(研究)を知ることの魅力を感じて研究・大学教員の仕事につくところになった。伝統的な木造建築のしぐみを対象として、滞在しながらおこなう研究スタイルため、春・夏・冬休みには各地に滞在しながら研究している。

● これまでの道のり

東京の大学卒業後に地元茨城の大学の修士課程に進学。その後は茨城の設計事務所働きながら、博士課程に進学。学位取得後は、東京の大学で7年間研究教育を行った後に山形大学に赴任。

● ワーク・ライフ・バランス

山形に赴任が決まったことと、子供ができたことがほぼ同時だったため、生活の方法はよく考えた。妻も同じ建築の大学教員なのでお互いのキャリアを考えて、平日は山形で、週末は東京の2拠点居住を選択した。平日は、妻がひとりで子供の世話をしているので負担が大きい。朝食・夕食時には、テレビ電話で食事をとるようにしている。また、毎週末東京まで往復すると、交通費がかかるが考えないようにしている。

● 夢や目標

地域社会に貢献できる建築家・設計者・デザイナーを育てて、協働したい。

● 学生へのアドバイス

学生時代に考えていたことや行動は、もちろん稚拙だけれども実は本質的だったりするのではないかと考えている。日々忙しくなると忘れてしまいがちだが、結果がすぐに出なくても考え続けること。

● 「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

世の中の雰囲気が変わってきたような気もするが、まだまだ問題がある。現に自身の家庭でも妻の負担が大きくバランスが悪い。



① なぜ、山形と東京の2拠点で生活することを選択したのですか。

A 妻も大学教員なのでお互いのキャリアを考えました。また、交通費はかかるが、違う視点を持つことができ、2つの地域の良さを享受できるから。

講義の振り返り

📖 フィールドワークが必要な研究をされている上、山形と東京の2拠点居住という、費用と体力と時間がかかる大変な生活をしていても、前向きに考えていて、先生の考え方と行動力に感銘を受けた。

👩‍👧‍👦 奥さんの平日のワンオペ育児の負担を減らすためにネットショッピングで食材を届けたり、帰省中の週末に子育てを担当するなど、2拠点居住の状況でできることをやっている点がすごいと思った。

💡 特に印象に残ったのは、子供を授かった時に、「自分も妻も研究者として独立していると思ったから、自分のキャリアと妻のキャリアのどちらかを取るという選択肢はなかった。」と仰っていたことだ。

👨‍👩‍👧 夫婦どちらかではなく、それぞれのキャリアを歩むということは、男女共同参画社会を考えるうえで重要だと感じた。家族のつながりを保つための時間の使い方や家事の分担など、仕事と家庭のバランスを保つ工夫を学んだ。

研究者のワークライフバランス

11月18日(水) 14:40~16:10

講師

網干 貴子

学術研究院准教授(農学部担当)

Profile

30歳代
新潟県出身

専門は生物有機化学、化学生態学。植物と昆虫の相互作用に使われる化学物質の研究を行っている。大学卒業後、任期付き研究員を経て、大学教員に至る。

● 就職した動機と仕事の内容

大学に入ってから、自然界の様々な現象に関係している化学物質や化学反応に興味をもつようになり、いろんな仕事に自由に取り組める大学教員を目指した。仕事は有機化学などの授業、植物の化学的な防御反応の研究、および学務など。

● これまでの道のり

大学3年生までは、旅行に行ったりアルバイトをしたりとのんびり過ごしていたが、4年次の研究室配属以降は先輩や先生方に鍛えられて勉強漬けの日々だった。大学院を卒業後は、博士研究員として数年修業し、現在に至っている。

● ワーク・ライフ・バランス

植物や昆虫の成長にあわせて実験をする必要があるので、バランスをコントロールするのは難しい。疲労困憊にならないように、休日はしっかり休むようにしている。

● 夢や目標

化学好きの学生を増やすこと。
研究を通して地域の発展に貢献すること。

● 学生へのアドバイス

新型コロナウイルス感染症の影響で、対面での交流が減少しているが、オンラインなども利用してなるべく人との交流を大事にしよう。



Q 生活で大切にしていることはあるか。大学時代にやっておくべきことは何か。

A 健康が一番大事なので、過労に気をつけている。学生時代は一番時間があるときだから、旅行は楽しいので行った方がよいと思う。

講義の振り返り

大学教員は、興味のある分野を仕事として追究することができ、魅力的な職業だと感じた。ただ、自由度が高いメリットがあるが一方、気を付けないと仕事に歯止めがかからなくなるといったデメリットもあり、ワークライフバランスを取ることが難しいと思った。

農芸化学やポスドク、研究室の話はどれも興味深く、ためになった。また、研究内容を聞いて、多くの人々を助けたり支えたりすることにつながる研究をされてこられたのだと思った。将来、私も人々に貢献できるような研究がしたいと改めて考えさせられた。

留学には多くの準備があることを知り、驚いた。学生時代から大学教員になるまでのお話を聞き、研究職の大変さも隠さずに話してもらって有難かった。地域からの依頼に対応し、地域貢献できる喜びがあることも分かった。

コロナ禍で人と人とのつながりを強く感じるようになった。先生の経験談から、人と人とのコミュニケーションを大切にすることで、人生の道しるべとなるヒントを得ることができると感じた。

マルチステージのライフデザイン

11月25日(水) 14:40~16:10

講師

小倉 泰憲

学術研究院教授(理学部担当)

Profile

50歳代
岩手県出身

学生や産業現場で働く人のキャリアを研究。大学で音響工学を学び、企業でエンジニアとして働いた。その後、社会人大学院で心理学を学び、山形大学教授に転職。

● マルチステージのライフデザイン

これまでは「教育」「仕事」「引退」という3段階の生き方・働き方が多く見られた。しかし、これからは「教育」と「仕事」を複数回繰り返す多段階の生き方・働き方になるという説がある。これは私にも当てはまるので、紹介していきたい。

● 第1段階の教育と仕事

秋田大学で電子工学を学び、その後、東北大学大学院で修士・博士の5年間、音響工学を学んだ。28歳で民間企業(関東の警備業)の研究所で技術者として働き始めた。

● 第2段階の教育と仕事

働きながら、産業カウンセラーをめざして心理学を学び、日本キャリア・カウンセリング研究会でNPO 活動を開始。キャリア・コンサルタント養成講座の講師を行った。

● 第3段階での教育と仕事

筑波大学社会人大学院で働きながら学び、修士(カウンセリング)の学位とカウンセラーの資格を取得。キャリア開発の普及をめざし、山形大学理学部のキャリア教員に就任。平成23年10月1日、大きな転職が訪れた。前の日まで企業の課長だったが、この日から山形大学の教授になったのだ。関東から山形に住む場所が変わり、仕事内容は技術系の仕事からキャリア支援になるなど、生活も仕事も大きく変化した。

● 学生へのアドバイス

21世紀は技術革新による急激な変化をはじめ、政治・経済の不確実性が増し、今までのような3段階を前提とした長期的な計画は困難な時代になった。また、今の大学生の平均寿命は100歳ぐらいになると予想されている。この二つから言えるのは、長く生きる間に大きな転職が複数回訪れ、多段階の生き方・働き方をすることだ。大学生の皆さんはこれまでとは違うライフデザインと転職への心の準備が必要になる。



① なぜ転職した時に後悔しなかったのか。モチベーションを保つにはどうすればよいか。

A 後悔は自分で決めきれない時に残るもの。外的キャリアだけでなく、内的キャリアを見つめると決断しやすい。モットーは自分へアドバイスなので、自分に言ってみる。

講義の振り返り

一つ一つの質問に丁寧に答えていただき、皆が知りたいことを知ることができた。特に、「後悔は自分で決めきれない時に残るもの」という言葉や、モットーの持つ力が大きいということを改めて感じた。

「教育」「仕事」「引退」を繰り返すという考え方は今まで思ったことがなかったので、キャリア形成に対する新たな見方を身につけられた。

人生100年時代の中で、多段階の生き方・働き方が当たり前になると意識することが大切であることを学んだ。転職は自分のキャリアを積み重ねることだと捉えることで、前向きに多段階の働き方を実践できると感じた。

自分はこれまで外的キャリアからしか判断しなかったことが多く、後悔することも多かった。これからは自分のアイデンティティを見失わないようにするため、内的キャリアに目を向けようと思った。また、自分のライフ・テーマを見つけることが生き甲斐になり、生活や仕事などの環境の変化にも対応していけることが分かった。

男性の家事・育児への参加

12月2日(水) 14:40~16:10

講師

小野 卓也

曹洞宗洞松寺住職

Profile

40歳代
山形県出身

米沢女子短期大学非常勤講師、人権擁護委員、山形県家庭教育アドバイザー、妻が研究職で茨城県に平日単身赴任して10年、土日・平日で分担して子育て中。

● 就職した動機と仕事の内容

先代住職が亡くなったとき、自分が育ったお寺を空き寺にしたいがなかったため。仏教の研究と発信、お寺の維持管理、葬儀や法事、悩み事相談など

● これまでの道のり

地元の中学校、高校から東京大学に入学、文学部で仏教やインド哲学を学び、大学院に進学。修士課程在籍中に住職になり、結婚もしたが茨城に住み、お寺へは単身赴任で通う。博士課程に進学しインドに留学。帰国後は妻が単身赴任となる。最近博士号取得。

● ワーク・ライフ・バランス

田舎の小規模寺院は比較的自由度が高く、子育て(保育園の送迎や急病時の世話など)に柔軟に対応でき、自分の趣味(ボードゲームやバレーボール)に十分な時間をとれるのが強み。苦労もなくワークライフバランスが取れているのはありがたいと思う。

● 夢や目標

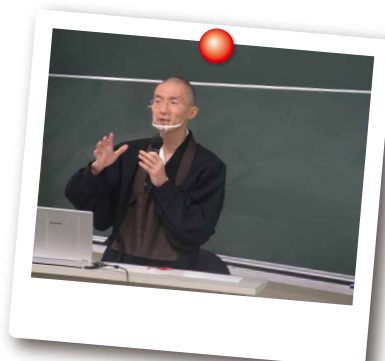
自分だけでなく、家族をはじめとする周囲の人たちが自分の持てるものやできることをお互いに喜んで与え合い、陰口や粗暴な言葉を言い合ったりせず、心穏やかに笑顔で楽しく悔いのない毎日を過ごし、健康に天寿を全うできること。一言で言えばこの世が極楽みたいになること。

● 学生へのアドバイス

地元でしたい仕事がないという方は、既存の職業に新しい価値を作り出すことを考えてみてはどうか。住職という伝統的な仕事ですら新しい世代はアップデートし続けている。これまでの業務に、自分らしさを加えていくのは、どんな仕事にでもできる。

● 「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

一番の課題は男性が家事をもっとすることだ。そうすることで女性が職場や地域でリーダーシップを発揮して活躍できるようになる。必要なのは議論でも闘争でもなく、見本になる人を増やして、草の根で性別分担の固定観念をなくしていくことだと思う。



❗ 悩みや不安を感じたときはどうしているか。男女共同参画のために必要なことは何か。

A ボードゲームなどの楽しいことを考えるようにしている。父や祖父が変わらないと難しい。世間体を気にせず、変わり者とと言われても自分がスタート地点になることが大事。

講義の振り返り

📖 東大に進学したこと、博士課程でインドに留学したこと、夫婦で子育てを分担していることなど、驚くことばかりだった。「過ぎ去ったことよりも今の一瞬に真心を込める」などのモットーもためになった。

📖 綱渡り状態(無理ゲー)でもクリアしてやるという考え方など、素敵だなと思った。家族と一緒にのときは笑顔でいること、スマホをできるだけ見ないことなど、父親になったら見習いたい。

📖 住職を継ぐ決断をしながらも学びたいことを実行し、さらに家庭まで持って、人生盛りだくさんだった。周りの人とのコミュニケーションを大切に、常に明るく過ごされている点を尊敬した。

📖 講義を聞き、孤独にならないことの大切さがわかった。大学の知り合いもほとんどいないため、コロナ禍の中で一人の時間が増えたが、人との交流をもっと大切にしようと思った。

学童クラブを支えるNPO活動

12月16日(水) 14:40~16:10

講師

富澤 直人

学術研究院教授(人文社会科学部担当)

Profile

50歳代
群馬県出身

専門は英語統語論。言語学の中の生成文法という分野で、人間言語のコアを成す文法原理の解明に主に英語と日本語からアプローチしている。

●就職した動機と仕事の内容

本学には生成文法を専門とする英語学者や言語学者が伝統的に在籍しており、その意味で恵まれた研究環境があったので、良い研究機関に籍を得られたと喜んだ。専門教育では英語学(英語の文法分析)と英語を、基盤教育では英語と言語学を、主に担当している。

●これまでの道のり

大学3年生の頃にやりたいことが見つかって、大学院に進学し、助手・講師を経て、本学に籍を得て…というあたりは多分に自分主導の生活だったが、やはりと言うか、子どもを授かるとそういう訳にはゆかなくなる。そのひとつの展開を本講義で紹介したい。

●ワーク・ライフ・バランス

共働き家庭のため、子どもは就学と同時に放課後を学童クラブで過ごす日課だった。このクラブの役員を引き受けたタイミングで、長年構想していたというプロジェクトのいわば責任者の役が回ってきた。そういった経緯のため、現在もNPO役員としてボランティアで運営に携わっている。子どもが安全に過ごせる場所があれば親としても安心して仕事に専念できるという実体験を原動力にしている。

●夢や目標

偶然とは言えこのボランティア活動に携わることができ、壮大な目標を立ててある。：最も子育てしやすい地区にすること。この一助になれば…と思っている。

●学生へのアドバイス

家族間のつながりを縦の関係とすれば、横の関係つまり友だち(や同僚)との関係をも豊かなものにすることが、人生のどのステージでも大切だと思う。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

NPOを設立する際には、実施する活動の種類を、既定の20項目の中から少なくとも1つ選択する必要がある。「子どもの健全育成」と「男女共同参画社会の形成」の両方を選択して設立したが、実際の運営の中では、子どもの安全・安心の確保と保護者の就業の支援などが両立しないケースが些細な場面にも表出してくる。



① 横の関係を豊かにするために、やはり地域行事に参加した方が良いか。

A 義務でなく、熟した時に参加すればよい。淡い付き合いの先に濃い付き合いがある。祖父母がいないので、横の関係を伸ばし、助け船を出してもらってきた。

講義の振り返り

📖 子どもが小学校に入学した際、放課後の子どもを預かってくれる場所がない問題が、「小1の壁」と言われていることを知った。女性が活躍する社会を実現するためにも、学童クラブの待機児童の問題の解決も必要ことが分かった。

📖 子どもの安全が確保されることによって親は安心できることが分かり、そのために力を尽くすことの大切さを感じた。先生はそれをボランティアで強い責任感を持って行って、素晴らしいと思った。

📖 NPOについて知ることができ、興味を持った。先生は、NPOの活動に対して「子どもの安全が優先」という芯がはっきりしていて、素晴らしいと思った。また、「親は子どもがつくったネットワークを利用するとよい」という考え方は、参考にしたい。

📖 先生の英語の文法分析と活動の見つけ出し方が共通していることが、印象的だった。あるべき全体像を持つことは、活動の推進力になる気がした。共働き家庭が増えていく中、子育ての際には夫婦での協力だけでなく、周りの人との繋がりも大切にしたい。

長い目で見て柔軟性を持つ

12月23日(水) 14:40~16:10

講師

中西 正樹

学術研究院教授(地域教育文化学部担当)

Profile

40歳代
大阪府出身

専門は情報科学。大学院博士後期課程を2年で中退 → 大学助手として就職 → 仕事をしながら学位を取得 → 2009年に山形大学に赴任。家族は妻と子ども一人。

● 就職した動機と仕事の内容

就職した動機: 研究が好きで、博士後期課程まで進んで身に付けた内容を最も発揮できる仕事だから。仕事の内容: 情報科学の研究、算数・数学教育、最近は管理的な仕事。

● これまでの道のり

高校生時代は今と比べると随分とボーっとしていた。大学生になって、自分のやりたいことが見えてきた。それでもまだいろいろと甘い。社会に出てからは勉強の日々。専門性の高い職だが、必ずしも専門分野にとらわれない柔軟性が必要と気づく。

● ワーク・ライフ・バランス

昔ながらのブラックな研究室体制で育ってきたものの、山大赴任後に自分の研究室を持つからはホワイトな環境を目指している。特に管理職になってからはその意識を強く持つようにしている。自分自身のワーク・ライフ・バランスについては、有休の上手な使い方が重要と考えている。仕事に責任を持ちつつも、「自分がいなくても大丈夫」という肩の力の抜き方を覚えることが大事。

● 夢や目標

まだまだ長い仕事人生、どこまで経験を積み、どこまで変わっていきけるかはわからないが、現状維持にせず、自分自身、常に変化していくことが目標のひとつ。

● 学生へのアドバイス

肩の力を抜くことも100%を目指す。人任せにせず、常に自分で考えて行動する。何事も経験が大事。

● 「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

男女共同参画社会については、近年様々な課題が明確になりつつある。「きっとこうだろう」「こうすれば良いに違いない」という自身の経験のみに基づく判断ではなく、正しい知識を勉強し、それに基づく判断をすることが大切だと思われる。



① 自分のやりたいことをどうやって見つけるか。大学で経験しておくべきことは何か。

A 食わず嫌いをせず、まずは手を出してみるようにする。大学時代は無駄を許容すること。打算的だとその後の人生が広がらない。

講義の振り返り

「自分がやりたい事を見つけるには食わず嫌いをしない、経験はその時にしか出来ない」という言葉が印象に残った。まだ将来やりたい事が決まっていなかったが、今思うと経験せずに自分には向いていないと選択肢を狭めていたように思う。

「時代によって価値観は変わるものとして捉え、柔軟に対応する」、「長い目で見ればどこかで必ず辻褃が合う。人生では良い事・悪い事の両方が必ず起きるため、逐一悲観したりしないような柔軟な考え方が必要だ」という考え方に、大いに納得した。

「良いと思っていたことが後に悪いことになったり、悪いと思っていたことが後に良いことになったりする」という言葉が印象に残った。自分は最短ルートを行くべきだと考えていたが、回り道が後々に正解だったと思うこともあるかもしれない。

自分は肩の力を抜くことが苦手だったが、「肩の力を抜くとは、100%を目指す上でよく周りを見ることだ」というアドバイスが胸に刺さった。謙虚さや感謝の気持ちの大切さに改めて気づいた。

山形大学男女共同参画基本計画(第2次)の施行

山形大学は、令和2年4月に第2次山形大学男女共同参画基本計画を施行しました。第2次基本計画では、令和2年度から10年間を計画期間とし、男女共同参画とダイバーシティを一層推進することを目的に、基本方針及び具体的施策を定めています。女性教員比率や女性管理職比率に関するより高い目標を掲げ、「無意識のバイアス」や性的指向・性自認等への配慮なども明記しました。また、ダイバーシティを推進するため、地域や県内外の大学等とネットワークを拡大していきます。初年度は、「多様な性に関するガイドライン」を策定し、研究・仕事と家庭生活の両立支援制度の充実を図りました。



探究学習で学ぶキャリア形成

【授業名】

山形大学 基盤共通教育

「キャリア形成とワーク・ライフ・バランス (山形大学から学ぶ)」

【授業の目的】

- ①ワークライフバランスについて考え、自分のキャリア・ビジョンを描く。
- ②男女共同参画社会を理解し、課題を考える。
- ③新聞学習で社会人基礎力を身につける。

【授業の計画】

- いろいろな分野のゲスト講師による貴重な講義。
- 講師への事前質問や進行などを学生が担当。
- グループごとに課題探究学習を行う。
- 新聞切抜きレポートに取り組む。
- キャンパス保育所の見学、地域との交流。

【学生の感想】

- ★文系から理系まで、どの先生の講義も興味深く、男女共同参画社会の一員として、将来の職業のことだけでなく、視野を広げたキャリア・ビジョンを持つことができた。
- ☆この授業を選んだ理由は、大学生になっても自分のキャリアを明確にできずにいたからだった。今までの授業の中で一番ためになり、一番楽しく有意義な時間だった。
- ★コロナ禍で一人の時間が増えたが、講義で「人と交流して孤独にならないことの大切さ」がわかった。「今を大切に生きる」という言葉も心に残った。
- ☆新聞レポートで自主的に新聞を読む習慣が身に付き、司会・記録などの役割分担をとおしてコミュニケーション力・協調性が高まった。

男女共同参画とは

「男女共同参画社会基本法」

(平成十一年六月二十三日法律第七十八号)

第一章総則(目的) 第一条

- ・男女の人権の尊重
- ・社会経済情勢の変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現する緊要性
- ・基本理念を定め、並びに国、地方公共団体及び国民の責務
- ・施策の基本となる事項を定めることにより、男女共同参画社会の形成を総合的かつ計画的に推進

山形大学は、「男女共同参画社会基本法」の理念に基づき、男女共同参画のために大学が担うべき役割と責任を自覚し、「山形大学男女共同参画基本計画」(平成22年)を策定し、男女共同参画を推進してきました。令和2年度から第2次基本計画に従って、さらに充実した取組を進めていきます。

性別にかかわらずに、すべての人が個性と能力を發揮できる世の中がダイバーシティ社会です。我が国では男女共同参画基本計画や科学技術基本計画等の下、男女共同参画や教育分野におけるダイバーシティ推進を図っています。山形大学は平成27年度に文部科学省のダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)に採択され、米沢栄養大学、大日本印刷株式会社研究開発センターと連携し、ダイバーシティ研究環境の実現に取り組んできました。

この「キャリア形成とワーク・ライフ・バランス」の授業は、男女共同参画を担う次世代を応援するため、男女共同参画推進室が担当しています。

令和3年3月25日発行

発行 山形大学男女共同参画推進室

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

TEL 023-628-4937

Mail y-danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

編集 准教授 井上榮子